

TOPICS

ブルース・フォークル氏来日講演会 in 松本

世界的に著名な獣医師ブ

ルース・フォークル博士がジャパ

ン聴導犬協会の招きで来日されました。博士は、犬の訓練や動物行動学に関する本をたくさん世に出されています。本年9月23日に2つの講演をされました。アークからエリザベス・オリバー、パット・ローリーの2名とチョビが参加しました。アークのPR犬であるチョビも松本での講演に出席しました。(チョビは私たちと一緒に松本市内のブエナ・ビスタホテルに泊まり、お行儀も良く、しつけができた犬はこのホテルでも受け入れられることを証明してくれました。)

カナダ生まれのフォークル博士は、ロンドンで動物クリニックを開業し30年になります。その期間、獣医学の変容はめざましく、現在獣医学が直面する最大の課題は動物福祉であるという指摘をされました。

その変化の一つに女性獣医師の増加があげられます。たとえば、スウェーデンでは獣医師の95%が女性です。そのような女性獣医師たちによって、より気を配った、また動物福祉に配慮した診察が生み出されました。フォークル博士のクリニックでは、診察室をリラックスした、また家庭的な雰囲気のあるものにしてあります。たとえば、職員は制服を身につけず、自分たちの飼い犬がクリニック内を自由に歩き回っています。その目的は、リラックスした雰囲気を作り出すことによって、患者である犬と飼い主両者のストレスを減らすことにあります。犬、特に子犬の場合、初めて診察を受けるときは、診察されるというだけで、また注射を受けるというだけで大変怖がります。このような反応は自然なことですので、博士は診察が怖いものではなく、むしろ楽しいことであることを動物に解らせるため、床に餌をばらまくという方法を使っておられます。また、診察は台の上ではなく床の上で行われ、口輪はほとんど使いません。犬をリラックスさせれば、飼い主もリラックスするからです。

今日、獣医師は医学的な問題と同じくらい重要な動物の行動問題に直面しています。そのためフォークル博士を含む多くの獣医師は、犬の訓練士の仕事を称賛しています。ヨーロッパやアメリカの獣医学コースは、動物行動や動物福祉といった科目を取り入れています。獣医は動物の問題に対処するために、基本的な動物行動だけでなく、犬種独特の行動をも理解しておかなければなりません。たとえば、犬の攻撃性には12種類のタイプがあり、問題行動に対して正しく対処するためには、どのタイプの攻撃性を扱っているかを知らねばなりません。最も一般的な原因は、一歳以下の犬を安楽死するケースで、病気やケガではなく、問題行動です。博士はクリニックで共に仕事をしている動物行動学者から、問題行動をもつ動物やその対処用治療薬に関する助言を得ています。

フォークル博士は次の点も力説されています。それは、犬猫の幼い頃の社会化のための訓練の必要性和早期学習の重要性です。子犬には3~12週間はよい性格形成のために不可欠な時期です。子猫の場合、その期間は短く、3~7週間といわれています。

よい獣医師とはどのような人でしょうか。フォークル博士は、応募してきた20名の獣医師の中から4名を絞り込みました。この4人は、みな研究成果もすばらしく、獣医師としての経験も豊富に持っていました。彼らに試験的に一日だけフォークル博士のクリニックで働いてもらいましたが、結論が出ませんでした。そこで、博士は4人のうち誰がベストであるかを9人のナースに尋ねると、ナースが全員一致で一人の人を選びました。博士がその理由を尋ねると、「この獣医師は、動物にまず話しかけています」という答えがかえってきました。動物に話しかけない獣医師はよい獣医師とはいえません。イギリスの動物専門のナースは、世界最高レベルの教育を受けていると言われています。博士は、よいナースを持つことは金を持つことと同じ程重要である、と述べられています。実際のところ、博士のクリニックでは、経験のあるナースは新卒の獣医師よりも給料がよいのです。

講演後の質疑応答で、安楽死の問題が出されました。博士は動物を安楽死させるか否かは、生きることを意味が問われていると主張されました。文化が違えば、安楽死に対する見方も違います。回復の見込みがない、威嚇をもった生活がもはやできない、また、生きていくことを意味をもはや持たない場合、動物のもつ苦痛や命を終わらせる責任が獣医師にはあると述べられています。

Dr Bruce Fogel, a veterinarian

and writer of many books on dog training and behaviour was invited by the Japan Hearing Dogs Association to give two lectures on September 23rd, 1999. Elizabeth Oliver and Pat Lawrie, a volunteer dog behaviourist staying at ARK together with Chobi, our PR dog travelled to Matsumoto in Nagano Prefecture to hear the lectures. (Chobi stayed with us at the Buena Vista Hotel. He behaved impeccably setting a good example to prove that a well-behaved dog can be accepted and welcome in any hotel)

Dr. Bruce Fogel, a Canadian by birth, has made London, where he has a veterinary practice, his home for the past 30 years. He described the enormous changes which have occurred in veterinary medicine during that time and said that the most important issue facing veterinary medicine today is animal welfare.

Amongst the changes are the huge increase in women veterinarians; for example in Sweden 95% of veterinarians are women. It is women veterinarians who have made the profession more caring and more welfare conscious. In Dr. Fogel's clinic the atmosphere in the consulting room is relaxed and homely; nobody wears a uniform and dogs belonging to the nurses wander freely around. This informal

前回のニュースレターでご紹介致しました、ジャパン聴導犬協会主催の「ブルース・フォークル氏来日講演会」が9月23日に開催されました。その講演会のもようをお伝え致します。

approach is designed to create a feeling of relaxation and to reduce stress for both the patient and its owner. Dogs, especially puppies on their first visit, naturally feel frightened while being examined and often having a needle stuck into them. So Dr. Fogel has treats scattered around the floor to make it a positive experience rather than a frightening one. He seldom lifts dogs onto an examination table, but after quietly approaching them examines them at floor level. He says he rarely uses a muzzle. If the dog is relaxed, the owner too becomes relaxed.

Veterinarians today deal as much with